集 合 住 宅

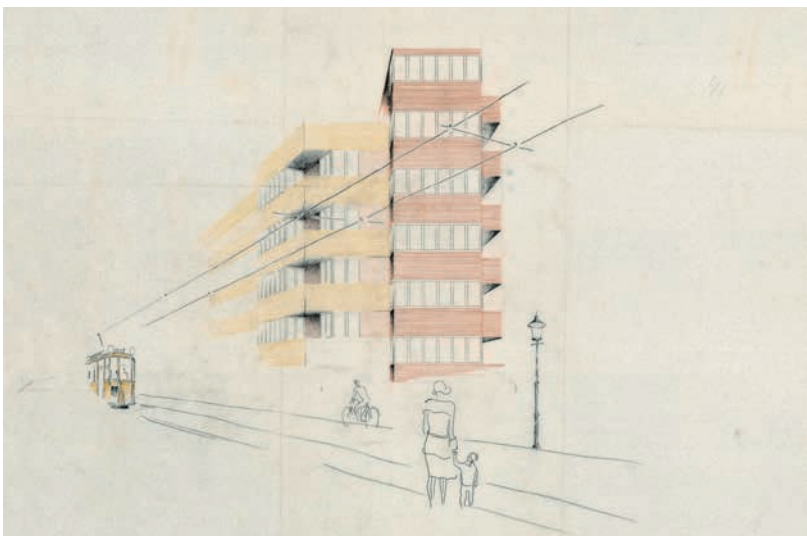
住宅設計におけるタイポロジー カミッロ・マーニ

参照｜本誌pp.2-5

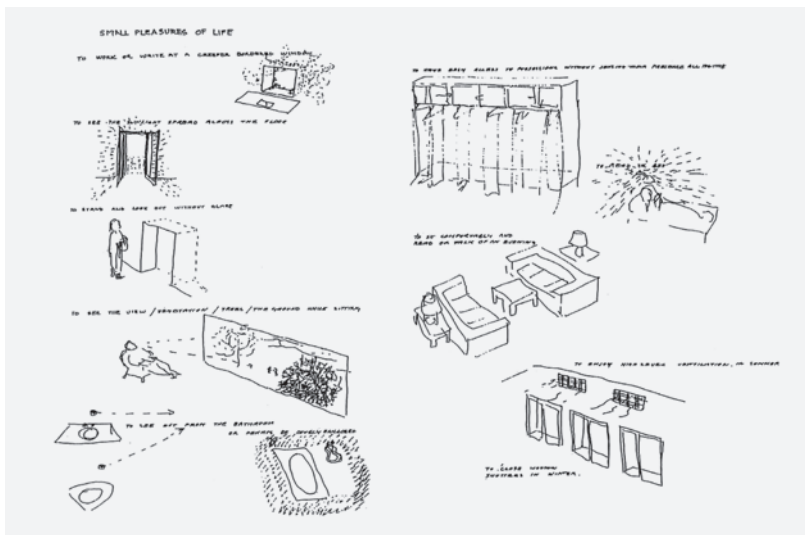
本号の『CASABELLA』では、改めて集合住宅について考える。今回選ばれ集められた作品には、建築的実験のチャンスとして、建築家の創作法と特定の機能的要請を調停する場として、住宅を変化させる豊かで異種混交的な方法が示されている。多くの解釈に開かれたこのテーマは、近代建築運動（モダン・ムーヴメント）の成功においても、諸都市の都市的性質を構築する上でも、長らく決定的な役割を果たしてきた。本特集の冒頭に、デンマークの建築家カイ・フィスカー（1893-1965）による素晴らしいスケッチを載せたのも偶然ではない。これら1920年代末に描かれた2点の透視図には、建築的ヴォキャブラリーの探求と都市を建設するための手段とを総合する住宅の価値が表れている。今もなお、同時代的な多くの挑戦――新住民の流入、既存の建築遺産の老朽化、新しい生活様式に突き動かされたさまざまな要求、都市再生によりもたらされたチャンス――に立ち向かうために呼び出される都市政策の議題の中で、住宅は優先的な役割を帯びている。しかしながら、住宅分野の専門家たちはこのテーマの重要性をごく一部しか把握しておらず、住宅を単に経済利益を追求する不動産売買取引といった狭い範囲に押し込めているように思われる。私たちは、都市化プロセスにおける経済利益を無視するほど無邪気ではない。過去も現在も、土地所有の値上がり益は都市成長の原動力であり続けた。これにより同じく明らかになったのは、特にイタリアにおいて、ミラノのような、不動産市場の活発さが同様に活発な建築的考察に対応しておらず、建築の議論がしばしば美容術の不毛な実験に終わる場所でさえも、住宅を巡る研究が懸念を抱かせるほど弱体化していることである。

『CASABELLA』は、批判的精神をもって、地理的に多様なコンテクストで実現された6つの集合住宅のプロジェクトを選んだ。規模、立地、素材、フォルムの点で多様なこれらの事例を観察すれば、本誌の注意深い読者はそれらに共通する要素に気付くことであろう。すなわち、ヴォキャブラリーの諸形態を越えて、建築プロジェクトのより深部に蓄積したクオリティの緻密さである。6つの物語に深く分け入るため、多くの切り口の中からタイポロジー（類型学）の観点を用いることとする。これらの建築の堅固さは、さまざまな生活空間の関係性を定義する設計の母型（マトリクス）として、建築類型（ビルディング・タイプ）を志向する研究からもたらされるとわれわれは確信している。タイポロジー選択の周辺には多くの問いが存在する――フォルムと構造の関係、動線の問題、モデュールの反復の最適化、形態的性質、建設方法の側面、想定される社会的諸関係。住まいはそこに住まう個人と共同体の役に立つ「暮らしのささやかな楽しみ」（アリソン＆ピーター・スミッソン）により成立することを認識したうえで、生活空間を序列化する力のある、小さくとも重要な記号を使って、タイポロジーの刷新を推し進める方法を発見するよう鼓舞するのである。平面図と断面図がいかにこの探求の特別な手段のひとつであるか、またこれ見よがしのフォルマリズムはいかに無益なものとなり、建築的クオリティを確定する際の余剰物に堕すかを再発見するよう促すのである。

かつて、さほど遠くない過去に、批評の大部分が類型（タイプ）を建築そのものの基礎と見なし、多くの人々が共有する「宗教」となった時代があった。本誌では当時、激烈なほど明確に方向の異なる動きが対抗し合い、他方で、イタリアは世界中から建築分野で最も興味深い論争のひとつの主戦場と見なされていた。現在、パノラマは完全に変化した。とはいえ、視線の方向を定めるには、非常に現実的であるが多分に忘れ去られたいくつかの考察を読み直すことが有益である。思い浮かぶ多くの書き手の中から、われわれはカルロス・マルティ・アリスの文章を掲載することを決めた。学術的に非常に厳密なこの研究者は、イタリアから遠く離れた、イタリアほど妥協的でないカタロニアの視点から、残酷でイデオロギー色の強い論争の展開を長年観察してきた。1988年の著書『アイデンティティの変動：建築における類型』（博士論文をまとめたもので、ジョルジョ・グラッシが序文を寄せている）に収められた短い論考の中で、カルロス・マルティ・アリスは類型を建築の基礎と捉え、そこには「論理的思考とアナロジー的思考が収斂する」と書いた。彼は類型の最も正当的な価値を、フォルムを啓蒙主義のように分類するにとどまらず、実験と革新の場としての過去の力を設計デザインの過程に刻印することのできる設計の母型（マトリクス）に見出している。この観点に立って、今回選び出した6つの集合住宅プロジェクトを考察することを提案したい。住宅を巡る6つの物語を語るための解釈の鍵となるであろう。



カイ・フィスカー：ヴォードラフスヴァイ通りの集合住宅、コペンハーゲン、1929｜透視図



アリソン＆ピーター・スミッソン：『居住の技を変える』（1993）に掲載した「暮らしのささやかな楽しみ」と題された一連のスケッチ

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

「**ラ・ベシンダード**」Buenos Aires, Argentina

設計＝アダモ＋ファイデン・アルキテクトス

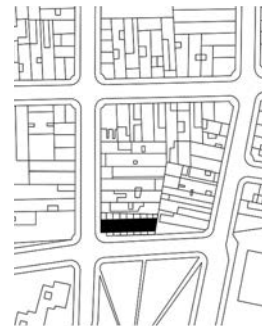
参照｜本誌pp.16-23

カミッロ・マーニ

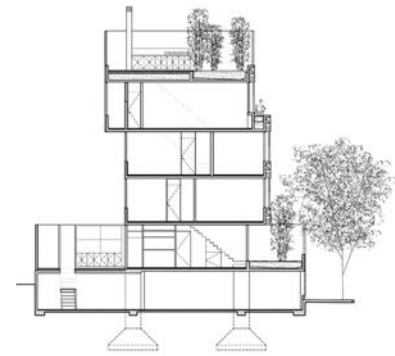
本誌は889号（2018）にてアダモ+ファイデン作品を大きく取り上げたが、再びこのアルゼンチンの建築設計事務所の建築を掲載する。本作はブエノスアイレスの中心部に位置する住宅建築である。周囲は碁盤目状のブロックが規則的に連続する街並みが特徴的で、そこでは短辺が道路と接し、長辺がブロックの奥行きを生かした矩形の敷地が目立つ。

この幾何学形態の反復は、時とともにアルゼンチンの首都に特有の住宅タイポロジーを生んだ。アダモ+ファイデンのプロジェクトはこれとは異なり、角地にある不定形の敷地を占め、驚くことに長辺が緑豊かなマファルダ広場に面している。この条件から建築家たちは新たな住宅類型（タイプ）の実験に向かった。そこでは一見して対立する2つの性質が目立つ。すなわち、大都市圏特有の高密度と、各住戸に専用の屋外空間を設けてより伝統的なテラスハウスを喚起するという野望である。建物のファサードには彼らの努力のタイポロジー的成果が凝縮されている。地上階の駐車場は基壇として機能し、その上に7つのデュープレックスと6戸のトリプレックスが積み重なり、全体として地上階に乗った5階建てとなる。各住戸に専有の屋外スペースがあり、そこに典型的な「アルゼンチン式バーベキュー場」を設けることもできる。デュープレックスの場合は2階に専用パティオがあり、専用階段と道路に面した緑地で駐車場に直結する。長手側ファサードに対して直交する耐力壁により柱等のないフロアが生まれ、屋内と屋外の浸透性が高まっている。

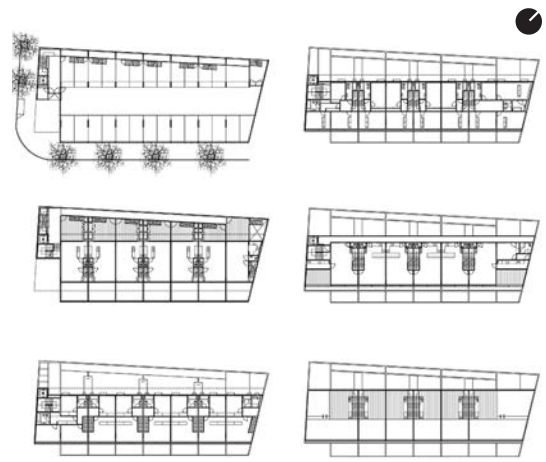
デュープレックスでは、夜のゾーンが3階を占める。トリプレックス住宅は、これとは異なり、5階が昼のゾーンとされ、そこから4階に降りれば夜のゾーンに、6階に昇れば専用の屋上庭園に行ける。動線システムは2階と5階に設けられたバルコニーで、横の階段で連絡する。角地になった端部は、小さな突出部の戯れと1階のヴォイドを生かしたタイポロジーの複合性が見て取れる。この建物の簡潔な特異さは素材の使い方にも現われている。外観はスティール・パネルで仕上げられ、厳密な連続水平窓と対置されている。一方、屋内は洗練された波打つ表情を



配置図



断面図



各階平面図

全景：右にマファルダ広場を見る

下にパティオ付きのデュープレックス、上にトリプレックスを見る

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

「**学生寮**」Plateau de Saclay, Palaiseau, France

設計=ブルーター+バウクンスト

参照｜本誌pp.38-45

カミッロ・マーニ

プラトー・ド・サクレーの学生寮は、パリ工科大学の将来的な拡張部と連結されたZAC［国土整備対象区域］に挿入されている。スイスの建築設計事務所ブルーターが、ベルギーの設計事務所バウクンストと共同で勝利した設計競技の成果である本プロジェクトは、タイポロジー的考察に関連してさらにもう1つのテーマを浮き彫りにした。フォルムと構造の関係である。U字形の配置構成により、大きな中庭が目を引く中庭式ブロックが完成する。建物には明確な機能的プログラムが組み込まれている。2層吹き抜けの1階は店舗と学生寮に付属する共有空間で占められ、地下階は専用駐車場に充てられた。2階と3階は公共の駐車場として使われる。

上層部に学生寮の3つの階があり、最上階はデュープレックス住宅の特徴をもつ。プログラムの複雑さは屋内空間にも認められ、そこでは構造の厳密さがフォルムの厳密さに反響している。支柱が規則的に連続して3つのスパンを支え、多様な用途（中央に走行路のある駐車場、中央の動線に面してワンルームが並ぶ寮、商業施設）に適した17mほどの一定の奥行きにより、建物にリズムが刻まれる。この規則性において建物の柔軟性が成立するのであり、駐車場は将来的に住宅機能に改変可能であるように、潜在的な用途変更が示唆されている。

ファサードは屋内の諸機能を忠実に反映するため、ファサードの多様なタイポロジーが積み重なっている。1階は完全に透明で、ブロックの内部と外部の浸透性が高められる。駐車場の階のファサードは開放されているが、学生寮は水平連続窓とされ、その上にデュープレックスの広いガラス壁と象徴的なヴォールト屋根が重なる。鉄筋コンクリートのアイコン的な2つの螺旋階段が中庭と住宅の階を直接つなぎ、建物の周壁の内側に自動車用のスロープが収められ、内部に驚くような光景を現出させる。

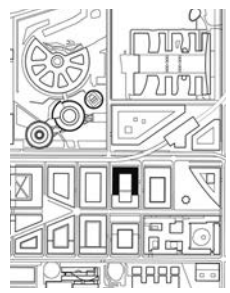
鉄筋コンクリート構造が特徴的なファサードは、水平の床スラブと支柱で構成され、側面の化粧仕上げの位置をファサードの前面よりセットバックさせたため、支柱の

中庭側ファサード：
地表より共有空間、駐車場、学生寮

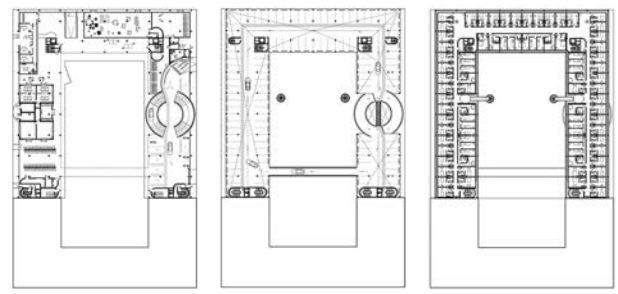
中庭より見る

ファサードに取り付く螺旋階段

左に螺旋階段、右に駐車場への斜路を見る



配置図



各階平面図

断面図

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

丸い断面が見えている。こうした選択が本作のブルータルな性質を強調し、タイポロジー的性質も形態的性質も変化させる役割を構造に委ねている。この探求にこそ、建築の価値と作り手たちの設計の一貫性が存在するのである。

作品：学生寮
設計：ブルーター＋バウクンスト
設計チーム：
ブルーター――Stéphanie Bru, Alexandre Theriot;
バウクンスト――Adrien Verschuere
構造：Batiserf VS-A（ファサード）
音響：Gamba
ランドスケープ：Franck Neau
施工：Sicra Idf, Rinaldi Structal（ファサード）
建築主：1001 Vies & Epa Paris Saclay
規模：建築面積 23,000 m²／住戸 192戸／駐車場 500台
スケジュール：竣工 2020年
所在地：Plateau de Saclay, Palaiseau, France

「コーポラティブ住宅ラ・ボルダ」 Barcelona, Spain

設計＝ラコル・アルキテクトゥーラ・コーペラティバ

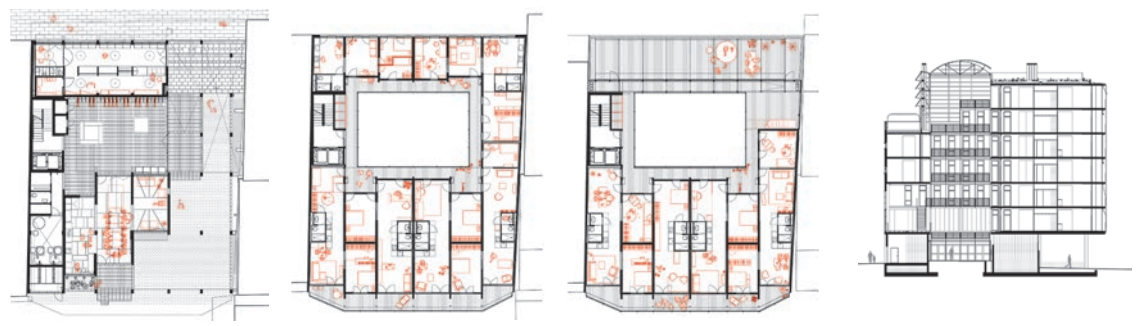
参照｜本誌pp.46-57

カミッロ・マーニ

このプロジェクトは「カン・バトリョ」という大規模計画の一環として立ち上がった。これは19世紀の大規模工場区域で、そこでは市民の活発な参加を通したオルタナティブな都市再生のかたちが実験中である。2014年に進歩主義的なサンツ地区の近隣住民（ベシノス）グループが領有した工場群の改変は、広く拡散した投機的アプローチに対抗する政治闘争の対象となった。

このコンテクストの内部で立ち上がったのが、コーポラティブ住宅のラ・ボルダであり、有名なミース・ファン・デル・ローエ賞の新興建築家部門を受賞した。特に興味深いのは共同体的価値が建築設計に貢献する方法で、そこからよりブルジョワ的な慣習を回避して住宅の現実的なクオリティを重視する、類まれな強度を具えた居住空間が生まれた。この設計プロセスは機能的性能（共有設備）もしくは環境的性能（快適さ）にとどまらず、建築を考えるより奥深いフォルムと関係している。

本作は28戸の集合住宅で、工場地帯の北端に沿って伸びるカレル・デ・ラ・コンスティトゥシオに面した建物の連続



各階平面図／断面図

デュープレックスのヴォールト天井

南側ファサード

北側ファサード

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

欺く見た目 フランチェスコ・ダルコ

参照｜本誌pp.90-99

舞台の袖はストックホルムの市営墓地という、記憶が上演される舞台の袖である。1914年から15年に行われた、市営墓地拡張のための設計競技は、グンナール・アスプルンドとシーグルド・レヴェレンツが勝利した。25年後に火葬場が完成し、この代表作を飾る最後のエピソードとなった。アスプルンドとレヴェレンツは同様の修業過程を経ている。ドイツで建築の専門教育を受け、イタリアの美術アカデミーに代わるストックホルムのクララ・スコラで学んだ。1934年にレヴェレンツが墓地の仕事から排除された時、2人の協働関係は乱暴に断ち切られた。仕事上の偶然を越えて、彼らの対話がいかに白熱したものだったかを示す証拠は枚挙に暇がない。例えば、20年代後半に彼らはストックホルムの墓地にマルストーレム家とレティグ家の墓廟を建て、ポンペイの墓地の道の一画を、発掘からほぼ2世紀後に2,000キロ離れた地で具体化した。その約10年前に、アスプルンドはストックホルム墓地の「森の礼拝堂」を完成し、レヴェレンツはボーリンゲ近郊にクヴァルンスヴェーデンの礼拝堂を完成させた。彼らの対話の強度と意味に読者の関心を喚起すべく、レヴェレンツの有名作品には含まれないボーリンゲの礼拝堂の写真を何点か掲載する。それを見ることで、先に紹介したストックホルムでの回顧展を鑑賞できない人々の埋め合わせはできないとしても、われわれがそうだったように彼らも興味関心を刺激されるよう願っている。

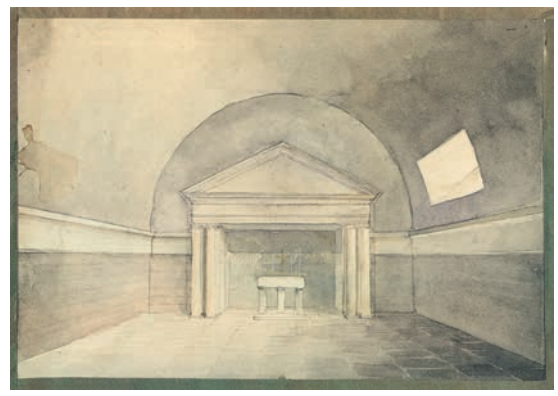
レヴェレンツの礼拝堂の屋根は地上8ｍに達し、スレートのシングル葺きである。ナルテックス（拝廊）は16本の柱で支えられている。同時期のアスプルンドによるストックホルム墓地の森の礼拝堂との比較は避けられない。類型（タイプ）は明らかに同じである。アスプルンド作品の場合、礼拝堂は12本の円柱で支えられている。レヴェレンツの礼拝堂の内部空間を規定するヴォールト天井に対して、アスプルンドの天井は板葺きの尖頭屋根の内側に穿たれたクーポラである。2つのナルテックスの円柱は自立し、イタリアにおいて異なる時代にオーダーがどのように使われたかという事例についての、同じ記憶の正反対の解釈である。アスプルンドがデザインした円柱は原初的なドーリス式である。台座はなく、上部の平板な柱頭は、平たく伸ばした簡素な円盤の上に、影の手ごたえがかろうじて得られる非常に薄い頂板が載っている。レヴェレンツの円柱は綺麗に整えられた大玉縁が、高い台座と恣意的ながら精緻に凹凸をつけられたイオニア式柱頭の上に載っている。突き出た頂板はその上の立方体により厚みが強調された。2つのナルテックスは木々の間によく似た方法で立ち現れる。ただし一方の上には鍍金された彫像――カール・ミレスの『死の天使』――が立ち、記憶を本質へ向かわせる厳密さの演習（エクササイズ）が完了する。これに対して、もうひとつのナルテックスには雪の落下を防ぐ形鋼が1本架け渡されている。典型的に機能的な性質にもかかわらず、それが支持体のないティンパヌムの様相を帯びるのは、自由で満足した、余興もしくはアイロニーに傾倒したデザインの遊戯を完了させる、ペンの簡潔な一描きの成果である。

掲載した写真を見た後で、建築における人相学的類似性にはそれまでの道を離れて別の道を探し当てる力があると、十分な理由をもって結論付けることができよう。ただしそれだけではない。アスプルンドとレヴェレンツの作品にしばしば起きるように、最も雄弁な作品であっても、もし両者の血縁関係がどのようなものだったかを確定することのみに留意して観察するならば、追憶は思い出の機械的な源泉であり、本稿で見たように、設計により記憶を自律的なものに変える方法の源泉ではないことに思い至るのである。

レヴェレンツ：クヴァルンスヴェーデンの礼拝堂、1924－

同：側面ファサード

同：ナルテックス



同：内観スケッチ

アスプルンド：森の礼拝堂、1920

レヴェレンツによるマルストーレム家墓廟（左）と、アスプルンドによるレティグ家墓廟、1927-30

無断での本誌の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan